

## 「人間の土地」(サン・テグジュペリ)

十五年に及ぶ職業飛行家としての経験けいけんに基く、サン・テグジュペリの自傳的作品であり、冒頭にかうある、「ぼくら人間について、大地が、萬卷ばんかんの書より多くを教へる。理由は、大地が人間に抵抗するがためだ。人間といふのは、障害物に對して戦ふ場合に、はじめて實力を發揮するものなのだ」。一九二〇年代から三〇年代にかけて、歐州・南米・アフリカを結ぶ航空路開發の草創期に、操縦士として砂漠や山岳や海洋といふ「障害物に對して戦」ひを挑み、生死を賭とした經驗を通して人間の本然の「實力を發揮」し得た英雄的な男達がゐた。彼等は語り手の「ぼく」にとつて、「思ひ出の中に、長い嬉しいあと味を残していつた人々」であり、彼等と結んだ人間關係は「千萬金せんまんでも絶對ぜつたいに贖あがなひ得ない、人生に「ただ一つ」の「眞まことの贅澤ぜいたく」だつたのである。

僚友れういうギヨメがさういふ英雄の一人であつた。ギヨメは眞冬のアンデス山中を飛行中暴風に遭あ

つて墜落し、機體から這出して命拾ひはするものの、氷點下四十度の寒氣の中、足も膝も手も血塗れにして四千五百メートルの峠を越え、絶壁を傳ひ、意識は固より「自己保存の本能」さへ失ひかけながらも、「救ひは一步踏み出すことだ」と信じて歩き続け、五日後に漸く救出されるのだが、その時の彼の顔は凍傷で眞つ黒に腫れ上り醜惡で見窄らしく、身體は「老婆のやうに縮んで」ゐた。だが、蘇生した時の最初の言葉は「賞讃すべき人間としての矜持の言葉」、「人間をそのあるべき位置に据ゑて榮譽あらしめ」る言葉だつた。彼はかう云つたのである、「斷言する」、自分がやつた事は「どんな動物もなしえなかつたはずだ」。

「ぼく」は思ふ、「人間であるといふことは、とりもなほさず責任をもつことだ」、ギョメに一步を踏み出させたのも、「自分に對する、郵便物に對する、待つてゐる僚友に對する責任」感に他ならず、「自ら引き受けた責任の觀念に深く根ざした」生き方をなし得るか否かが、詰りは人間と「動物」とを分つのだ。

それから五年後、「ぼく」自身がリビア砂漠に不時着して九死に一生を得る。リビア砂漠は十八パセントしか湿度がなく、「生命は、水蒸氣のやうに蒸發してしまふ」。そこで殆ど水分も攝れずに三日間、二百キロも彷徨つた末、遊牧民に救はれ奇跡的に生還するのだが、その間、

「ぼく」は頻りにギョメを思ふ。ギョメはアンデスの遭難から歸還した時、自分は「難破者に向つて驅けつけてきたのだ」と云つた。さうなのだ、僕の遭難を知り、僕の沈黙に苦悶し絶望してゐる人達、僕を待ち焦れてゐる彼等こそが本當の「難破者」なのだ、彼等を救ふ爲にこそ生きて歸らねばならない。

「精神の風が、粘土の上を吹いてこそ、はじめて人間は創られる」との一句でこの作品は結ばれてゐる。サン・テグジュペリにとつて、人間とは、「精神の風」に觸發されて、己れの内なる英雄のみならず、「眠れる音楽家を、詩人を、あるいはまた天文學者を」覺醒せしめ、さうして自らを創造して行かねばならぬ存在なのであつた。それ故、彼は所謂「小市民」への侮蔑を隠さない。「ぼくにはもう、理解ができない、あの郊外列車の市民たち、自分では人間だと信じてゐる」が、「その用途からいふと蟻のやうなものに退化してしまつたあの人たちを」。そんな「蟻」共よりも、例へば熱烈なイスラム信仰ゆゑに、無信仰の「ぼく」への殺意を隠さぬ砂漠の民の若者の方が如何に「賞賛」に價するか。

「人間の土地」は「小市民」的思考を覆す「逆説的眞理」に満ちてをり、近代文明の常識に囚はれぬ死生觀が實に魅力的な一書だが、刊行から五年後、一九四四年、作者は聯合軍飛行士と

して地中海を偵察飛行中に消息を絶つた。

(堀口大學譯、新潮文庫)